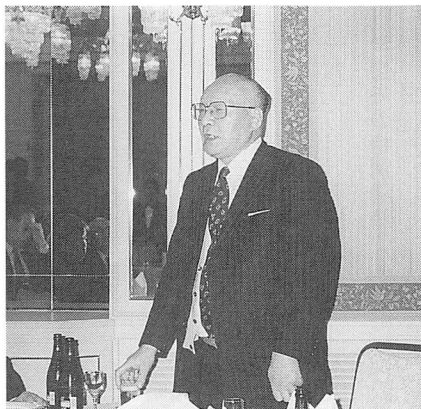


# 宗田一先生の略年譜

長門谷洋治・坂上俊之

一九九六年七月七日、日本医史学会常任理事の宗田一先生がお亡くなりになった。昨年十月の兵庫県西紀町におけるアスクレピオスのシンポジウムでお元気に発表しておられたお姿を知っている者にとっては信じがたいことである。また今年正月の京都国際ホテルの新年会で写真のように挨拶をされているが、あまりの急逝にただただ驚き悲しむばかりである。宗田先生のご生涯を年譜としてご紹介しよう。



## 故 宗 田 一 先 生

(1996年1月7日・京都医学史研究会  
新年懇親会、京都国際ホテルにて)

一九二二年(大正十年)三月一日、新潟県三島郡寺泊町寺泊に生まれる。生後すぐから中学卒業まで函館で育つ。

一九四一年、旧制官立金沢医科大学薬学専門部卒業。同年三月、武田薬品に入社、十三工場内武田薬品研究室に勤務。同年十二月、入宮(陸軍、主として千島松輪島駐屯)。一九四七年復員、武田薬品に復帰する。

一九四八年、吉富製薬企画課、ついで学術課、再び企画課。

一九五四年、吉富製薬バイエル薬品部課長。一九五八年、吉富製薬に復帰、学術部に属す。一九七四年、学術部長。一九七五年、医薬品本部次長。一九七六年、定年となるもその後も調査役、非常勤嘱託などを経て、一九八一年、退職する。また一九七四年から一九八〇年ま

で精神神経系薬物治療研究基金の事務局長を兼務。以後盛んな執筆活動と学会活動に専心しておられた。

一九九六年四月ころから体調を崩され、六月十一日肺腫瘍で入院。楽しみにしておられた札幌での医史学会に出席も叶わず、七月七日返らぬ人となられた。

先生の医史学会でのご活躍は素晴らしいものであった。御自分の研究や発表は勿論だが、多くの会員に丁寧に指導され、意欲と正しい方向性を与えて下さった。

日本医史学会では一九五六年から評議員、一九六八年から理事、一九六九年から監事、一九七六年常任理事に就任され、二十年間その職務を果された。なお、一九八九年から二年間は大鳥蘭三郎理事長時代に理事長代行を務められた。

一九九〇年、著書『図説・日本医療文化史』で第二回矢数医史学賞受賞。

学会での特別講演や記念講演は沢山あるが、医史学会に限れば、「日本製薬技術史の研究」（一九六五年）、「祭祀の医療思想」（一九八二年）、「華岡青洲研究のその後」（一九八二年、呉秀三先生没後五十年記念）、「日本医学のあゆみ」（一九八四年）、「医心方」千年記念、「富士川游先生没後五十年に寄せて」（一九九〇年、同記念）、この記念会では実行委員長を務められた。

この他の学会活動では、一九五四年の日本薬史学会の創立に際し発起人、長いこと幹事をされた後一九九三年には名誉会員。洋学史学会では一九九三年から一九九六年まで第二代会長。大阪の医学史研究会では一九六〇年より幹事。京都医学史研究会では一九八〇年から顧問。医学切手友の会関西支部では一九八六年より顧問、毎回先生の講義を拝聴することができた。

教職関係では、いずれも非常勤講師として、京都薬科大学では薬学史、大阪大学医学部で医学概論、関西鍼灸短期大学で医学概論を担当された。

その他、役職として次のようなものがあり、先生の活動の広さが窺える。日本医学文化保存会評議員、野間科学医学

研究資料館理事、武田科学振興財団杏雨書屋運営協議会委員、適塾記念会理事、日本薬学会百年史編集委員長（一九八〇年）、日本薬局方百年史編集副委員長（一九八三年）、北里研究所附属東洋医学総合研究所医史学研究所顧問、国際日本文化研究センター共同研究員。

著書編著文献などは非常に多数で、今回の紙面に入りきれず、主要著編書のみ止め、号を改めて掲載するように編集委員会で検討中とのことである。

『日本製薬技術史の研究』（薬事日報社、一九六五年）、『近代薬物発達史』（薬事新報社、一九七四年）、企画共編『図説日本医事文化資料集成』全五巻（三一書房、一九七九年）、『京都の医学史』（思文閣出版、一九八〇年）、『日本の名薬―売薬の文化史―』（八坂書房、一九八一年）、『健康と病の民俗誌―医と心のルーツ―』（健友館、一九八四年）、『図説・日本医療文化史』（思文閣出版、一九八九年、一九九四年再版）、『渡来薬の文化誌―オランダ船が運んだ洋薬―』（八坂書房、一九九三年）。

〔後記〕宗田一先生の略年譜についてはご令室々し子様初め、関係各位多数のご協力を得た。厚くお礼申し上げます。